**Voici le texte de *Keisei Sanshoku* étudié avec Yoko Orimo dans le premier atelier à l'Institut d'Etudes Bouddhiques en octobre 2014. Keisei-sanshoku** (La voix des vallées, les formes-couleurs des montagnes**)**est traduit en français dans le tome 1 de la Traduction intégrale du Shôbôgenzô (La Vraie Loi, Trésor de l'œil) de Yoko Orimo (Ed. Sully 2005, réédition 2012). Le texte japonais ci-dessous est **à peu près** présenté en paragraphes comme dans le livre de Y. Orimo pour faciliter la recherche. Les I, II, III correspondent aux \* placés entre certains paragraphes.

Ce texte est le 25ème de la Nouvelle Édition du Shôbôgenzô.

**正法眼蔵第二十五　渓声山色**

**阿耨菩提に伝道授業の仏祖おほし、粉骨の先蹤即不無なり。断臂の祖宗まなぶべし、掩泥の毫髪もたがふることなかれ。各々の脱殻をうるに、従来の知見解会に拘牽せられず、曠劫未明の事、たちまちに現前す。恁麼時の而今は、吾も不知なり、誰も不識なり、汝も不期なり、仏眼も覰不見なり。人慮あに測度せんや。**

\*

**I.1.大宋国に、東坡居士蘇軾とてありしは、字は子瞻といふ。筆海の真龍なるべし、仏海の龍象を学す。重淵にも遊泳す。曾雲にも昇降す。あるとき、廬山にいたれりしちなみに、渓水の夜流する声をきくに悟道す。偈をつくりて、常総禅師に呈するにいはく、**

 **渓声便是広長舌《渓声便ち是れ広長舌》、
　　山色無非清浄身《山色清浄身に非ざること無し》。
　　夜来八万二千偈《夜来八万二千偈》、
　　他日如何挙似人《他日如何にして人に挙似せん》。
  この偈を総禅師に呈するに、総禅師、然之す。総は照覚常総禅師なり、総は黄龍慧南禅師の法嗣なり、南は慈明楚円禅師の法嗣なり。**

**2.居士、あるとき仏印禅師了元和尚と相見するに、仏印さづくるに僧衣・仏戒等をもてす。居士、つねに法衣を搭して修道しき。居士、仏印にたてまつるに、無価の玉帯をもてす。ときの人いはく、凡俗所及の儀にあらずと。**

**3.しかあれば、聞渓悟道の因縁、さらにこれ晩流の潤益なからんや。あはれむべし、いくめぐりか現身説法の化儀に、もれたるがごとくなる。なにとしてか、さらに山色をみ、渓声をきく。一句なりとやせん、半句なりとやせん、八万四千偈なりとやせん。うらむべし、山水にかくれたる声色あること。又よろこぶべし、山水にあらはるる時節因縁あること。舌相も懈倦なし、身色あに存没あらんや。しかあれども、あらはるるときをや、ちかしとならふ、かくれたるときをや、ちかしとならはん。一枚なりとやせん、半枚なりとやせん。従来の春秋は山水を見聞せざりけり、夜来の時節は山水を見聞することわづかなり。いま、学道の菩薩も、山流水不流より学入の門を開すべし。**

**4.この居士の悟道せし夜は、そのさきのひ、総禅師と無常説法話を参問せしなり。禅師の言下に飜身の儀いまだしといへども、渓声のきこゆるところは、逆水の波浪たかく天をうつものなり。しかあれば、いま渓声の居士をおどろかす、渓声なりとやせん、照覚の流瀉なりとやせん。うたがふらくは、照覚の無情説法話、ひびきいまだやまず、ひそかに渓流の夜の声にみだれいる。たれかこれ一升なりと辦肯せん、一海なりと朝宗せん。畢竟していはば、居士の悟道するか、山水の悟道するか。たれの明眼あらんか、長舌相、清浄身を急著眼せざらん。**

\*

**II.1.又香厳智閑禅師、かつて大潙大円禅師の会に学道せしとき、大潙いはく、なんぢ聡明博解なり。章疏のなかより記持せず、父母未生以前にあたりて、わがために一句を道取しきたるべし。**

**2.香厳、いはんことをもとむること数番すれども不得なり。ふかく身心をうらみ、年来たくはふるところの書籍を披尋するに、なほ茫然なり。つひに火をもちて、年来のあつむる書をやきていはく、画にかけるもちひは、うゑをふさぐにたらず。われちかふ、此生に仏法を会せんことをのぞまじ、ただ行粥飯僧とならんといひて、行粥飯して年月をふるなり。行粥飯僧といふは、衆僧に粥飯を行益するなり。このくにの陪饌役送のごときなり。
　3.かくのごとくして大潙にまうす、智閑は心神昏昧にして道不得なり、和尚わがためにいふべし。大潙のいはく、われ、なんぢがためにいはんことを辞せず。おそらくは、のちになんぢわれをうらみん。かくて年月をふるに、大証国師の蹤跡をたづねて武当山にいたりて、国師の庵のあとにくさをむすびて為庵す。竹をうゑてともとしけり。あるとき、道路を併浄するちなみに、かはらほとばしりて竹にあたりて、ひびきをなすをきくに、豁然として大悟す。沐浴し、潔斎して、大潙山にむかひて焼香礼拝して、大潙にむかひてまうす、大潙大和尚、むかしわがためにとくことあらば、いかでか、いまこの事あらん。恩のふかきこと、父母よりもすぐれたり。つひに偈をつくりていはく、**

 **一撃亡所知《一撃に所知を亡ず》、
　　更不自修治《更に自ら修治せず》。
　　動容揚古路《動容古路を揚ぐ》、
　　不堕悄然機《悄然の機に堕せず》。
　　処々蹤跡無《処々蹤跡無し》、
　　声色外威儀《声色外の威儀なり》、
　　諸方達道者《諸方達道の者》、
    咸言上々機《咸く上々の機と言はん》。**

**この偈を大潙に呈す。大潙いはく、此子徹也《此の子、徹せり》。**

\*

**III.1.又、霊雲志勤禅師は三十年の辦道なり。あるとき遊山するに、山脚に休息して、はるかに人里を望見す。ときに春なり。桃花のさかりなるをみて、忽然として悟道す。偈をつくりて大潙に呈するにいはく、**

 **三十年来尋剣客《三十年来尋剣の客》、
　　幾回葉落又抽枝《幾回か葉落ち又枝を抽んづる》。
　　自従一見桃花後《一たび桃花を見てより後》、
　　直至如今更不疑《直に如今に至るまで更に疑はず》。**

**2.大潙いはく、従縁入者、永不退失《縁より入る者は、永く退失せじ》。すなはち許可するなり。いづれの入者か従縁せざらん、いづれの入者か退失あらん。ひとり勤をいふにあらず。つひに大潙に嗣法す。山色の清浄身にあらざらん、いかでか恁麼ならん。**

\*

**IV.長沙景岑禅師に、ある僧とふ、いかにしてか山河大地を転じて、自己に帰せしめん。師いはく、いかにしてか自己を転じて、山河大地に帰せしめん。**

**いまの道趣は、自己のおのづから自己にてある、自己たとひ山河大地といふとも、さらに所帰に罣礙すべきにあらず。**

**瑯瑘の広照大師慧覚和尚は、南嶽の遠孫なり。あるとき、教家の講師子璿とふ、清浄本然、云何忽生山河大地《清浄本然なるに、云何にしてか忽ちに山河大地を生ずる》、かくのごとくとふに、和尚しめすにいはく、《清浄本然、云何忽生山河大地》。ここにしりぬ、清浄本然なる山河大地を山河大地とあやま るべきにあらず。しかあるを、経師かつてゆめにもきかざれば、山河大地を山河大地としらざるなり。**

**\***

**V.1.しるべし、山色渓声にあらざれば拈花も開演せず、得髄も依位せざるべし。渓声山色の功徳によりて、大地有情同時成道し、見明星悟道する諸仏あるなり。かくのごとくなる皮袋、これ求法の志気甚深なりし先哲なり。**

**その先蹤、いまの人、かならず参取すべし。いまも名利にかかはらざらん真実の参学は、かくのごとくの志気をたつべきなり。**

**2.遠方の近来は、まことに仏法を求覓する人まれなり。なきにはあらず、難遇なるなり。たまたま出家児となり、離俗せるににたるも、仏道をもて名利のかけはしとするのみおほし。あはれむべし、かなしむべし、この光陰ををしまず、むなしく黒暗業を売買すること。いづれのときかこれ、出離得道の期ならん。たとひ正師にあふとも、真龍を愛せざらん。かくのごとくのたぐひ、先仏これを可憐憫者といふ。その先世に悪因あるによりてしかあるなり。生をうくるに為法求法のこころざしなきによりて、真法をみるとき真龍をあやしみ、正法にあふとき正法にいとはるるなり。この身心骨肉、かつて従法而生ならざるによりて、法と不相応なり、法と不受用なり。祖宗師資、かくのごとく相承して、ひさしくなりぬ。菩提心はむかしのゆめをとくがごとし。あはれむべし、宝山にうまれながら宝財をしらず、宝財をみず、いはんや宝財をえんや。**

**3.もし菩提心をおこしてのち、六趣四生に輪転すといへども、その輪転の因縁、みな菩提の行願となるなり。しかあれば、従来の光陰は、たとひむなしくすごすといふとも、今生のいまだすぎざるあひだに、いそぎて発願すべし。
ねがはくはわれと一切衆生と、今生より乃至生々をつくして正法をきくことあらん、きくことあらんとき、正法を疑著せじ、不信なるべからず。まさに正法にあはんとき、世法をすてて仏法を受持せん、つひに大地有情ともに成仏することをえん。かくのごとく発願せば、おのづから正発心の因縁ならん。この心術、懈惓することなかれ。**

**4.又この日本国は、海外の遠方なり、人のこころ至愚なり。むかしよりいまだ聖人うまれず、生知うまれず、いはんや学道の実士まれなり。道心をしらざるともがらに、道心ををしふるときは、忠言の逆耳するによりて、自己をかへりみず、他人をうらむ。**

**5.おほよそ菩提心の行願には、菩提心の発未発、行道不行道を世人にしられんことをおもはざるべし、しられざらんといとなむべし。いはんやみづから口称せんや。いまの人は、実をもとむることまれなるによりて、身に行なく、こころにさとりなくとも、他人のほむることありて、行解相応せりといはん人をもとむるがごとし。迷中又迷、すなはちこれなり。この邪念、すみやかに抛捨すべし。**

 **6.学道のとき、見聞することかたきは、正法の心術なり。その心術は、仏々相伝しきたれるものなり。これを仏光明とも、仏心とも相伝するなり。如来在世より今日にいたるまで、名利をもとむるを、学道の用心とするに、にたるともがらおほかり。しかありしも、正師のをしへにあひて、ひるがへして正法をもとむれば、おのづから得道す。**

**7.いま学道には、かくのごとくのやまふのあらんとしるべきなり。たとへば、初心始学にもあれ、久修練行にもあれ、伝道授業の機をうることもあり、機をえざることもあり、慕古してならふ機あるべし、訕謗してならはざる魔もあらん。両頭ともに愛すべからず、うらむべからず。いかにしてか、うれへなからん、うらみざらん。いはく、三毒を三毒としれるともがら、まれ なるによりて、うらみざるなり。**

**8.いはんや、はじめて仏道を欣求せしときの、こころざしをわすれざるべし。いはく、はじめて発心するときは、他人のために法をもとめず、名利をなげすてきたる。名利をもとむるにあらず、ただひとすじに得道をこころざす。かつて国王大臣の恭敬供養をまつこと、期せざるものなり。しかあるに、いまかくのごとくの因縁あり、本期にあらず、所求にあらず、人天の繋縛にかかはらんことを期せざるところなり。**

**9.しかあるを、おろかなる人は、たとひ道心ありといへども、はやく本志をわすれて、あやまりて人天の供養をまちて、仏法の功徳いたれりとよろこぶ。国王大臣の帰依しきりなれば、わがみちの見成なりとおもへり。これは学道の一魔なり、あはれむこころを、わするべからずといふとも、よろこぶことなかるべし。 みづや、ほとけのたまはく、如来現在猶多怨嫉《如来の現在にすら猶怨嫉多し》の金言あることを。愚の賢をしらず、小畜の大聖をあたむこと、理かくのごとし。又、西天の祖師、おほく外道・二乗・国王等のために、やぶられたるを。これ外道のすぐれたるにあらず、祖師の遠慮なきにあら ず。
　10.諸祖西来よりのち、嵩山に掛錫するに、梁武もしらず、魏主もしらず。ときに両箇のいぬあり、いはゆる菩提流支三蔵と光統律師となり。虚名邪利の、正人にふさがれんことをおそりて、あふぎて天日をくらまさんと擬するがごとくなりき。在世の達多よりも、なほはなはだし。あはれむべし、なんぢが深愛する名利は、祖師これを糞穢よりも いとふなり。**

**11.かくのごとくの道理、仏法の力量の究竟せざるにはあらず、良人をほゆるいぬありとしるべし。ほゆるいぬをわづらふことなかれ、うらむることなかれ。引導の発願すべし、汝是畜生、発菩提心、と施設すべし。先哲いはく、これはこれ人面畜生なり。又、帰依供養する魔類もあるべきなり。前仏いはく、不親近国王・王子・大臣・官長・婆羅門・居士《国王・王子・大臣・官長・婆羅門・居士に親近せざれ》。まことに仏道を学習せん人、わすれざるべき行儀なり。菩薩初学の功徳、すすむにしたがうてかさなるべし。
　12.又むかしより、天帝きたりて行者の志気を試験し、あるいは魔波旬きたりて、行者の修道をさまたぐることあり。これみな名利の志気はなれざるとき、この事ありき。大慈大悲のふかく、広度衆生の願の老大なるには、これらの障礙あらざるなり。修行の力量おのづから国土をうることあり、世運の達せるに相似せることあり。かくのごとくの時節、さらにかれを辧肯すべきなり。かれに瞌睡することなかれ。愚人これをよろこぶ、たとへば癡犬の枯骨をねぶるがごとし。賢聖これをいとふ、たと へば世人の糞穢をおづるににたり。**

**13.おほよそ初心の情量は、仏道をはからふことあたはず、測量すといへども、あたらざるなり。初心に測量せずといへども、究竟に究尽なきにあらず。徹地の堂奧は初心の浅識にあらず。ただまさに先聖の道をふまんことを行履すべし。このとき、尋師訪道するに、梯山航海あるなり。導師をたづね、知識をねがふには、従天降下なり、従地涌出なり。**

**14.その接渠のところに、有情に道取せしめ、無情に道取せしむるに、身処にきき、心処にきく。若将耳聴は家常の茶飯なりといへども、眼処聞声これ何必不必なり。見仏にも、自仏他仏をみ、大仏小仏をみる。大仏にもおどろき、おそれざれ、小仏にもあやしみ、わづらはざれ。いはゆる大仏小仏を、しばらく山色渓声と認ずるものなり。これに広長舌あり、八万偈あり。挙似逈脱なり、見徹独抜なり。このゆゑに俗いはく、弥高弥堅なり、先仏いはく、弥天弥淪なり。春松の操あり、秋菊の秀ある、即是なるのみなり。善知識この田地にいたらんとき、人天の大師なるべし。いまだこの田地にいたらず、みだりに為人の儀を存ぜん、人天の大賊なり。春松をしらず、秋菊をみざらん、なにの草料かあらん、いかが根源を截断せん。**

**15.又、心も肉も、懈怠にもあり、不信にもあらんには、誠心をもはらして、前仏に懺悔すべし。恁麼するとき、前仏懺悔の功徳力、われをすくひて清浄ならしむ。この功徳、よく無礙の浄信・精進を生長せしむるなり。浄信一現するとき、自他おなじく転ぜらるなり。その利益、あまねく情・非情にかうぶらしむ。
　16.その大旨は、願くは、われたとひ過去の悪業おほくかさなりて、障道の因縁ありとも、仏道によりて得道せりし諸仏諸祖、われをあはれみて、業累を解脱せしめ、学道さはりなからしめ、その功徳法門、あまねく無尽法界に充満弥淪せらん、あはれみを、われに分布すべし。仏祖の往昔(おうしやく)は吾等なり、吾等が当来は仏祖ならん。仏祖を仰観すれば一仏祖なり、発心を観想するにも一発心なるべし。あはれみを七通八達せんに、得便宜なり、落便宜なり。このゆゑに龍牙 のいはく、**

**17.昔生未了今須了《昔生に未だ了ぜずは今須く了すべし》、
　　此生度取累生身《此生に累生身を度取す》。
　　古仏未悟同今者《古仏も未悟にして今者に同じ》、
　　悟了今人即古人《悟了する今人即ち古人なり》。**

**18.しづかにこの因縁を参究すべし、これ証仏の承当なり。**

**19.かくのごとく懺悔すれば、かならず仏祖の冥助あるなり。心念身儀発露白仏すべし、発露のちから、罪根をして銷殞(しよういん)せしむるなり。これ一色の正修行なり、正信心なり、正心身なり。正修行のとき、渓声渓色、山色山声、ともに八万四千偈ををしまざるなり。自己もし名利身心を不惜すれば、渓山また恁麼の不惜あり。たとひ渓声山色八万四千偈を現成せしめ、現成せしめざることは、夜来なりとも、渓山の渓山を挙似する尽力未便ならんは、たれかなんぢを渓声山色と見 聞せん。**

**正法眼蔵渓声山色第二十五**

**爾時延応庚子結制後五日在観音導利興聖宝林寺示衆
　　寛元癸卯結制前仏誕生日在同寺侍司書写之　懐弉**